

研究員 の眼

発想する力

「色彩を持たない題名」の魅力

社会研究部門 主任研究員 土堤内 昭雄
(03)3512-1794 doteuchi@nli-research.co.jp

私は毎週はじめにこのコラムを掲載しているのだが、いつも悩むのがどんなタイトルをつけるかだ。「名は体を表す」というように、コラムの内容を正確に読者に伝えるためには、どんなタイトルが相応しいのか。少しでも多くの人に読んでもらうには、読者の興味を引くキーワードは何かと知恵を絞る。特に、WEB時代の読者のアクセスは、ひとえにタイトルの訴求力にかかっているからである。

先日、阿川佐和子さんの『聞く力』（文春新書、2012年）を読んだ。書店の店頭で平積みされているベストセラーだ。最近では、このような『～する力』という直截的なタイトルの本をよく見かける。思い浮かぶだけでも、『選ぶ力』（五木寛之、文春新書、2012年）、『生きる力』（なかにし礼、講談社、2012年）、『断る力』（勝間和代、文春新書、2009年）、『話す力』（齊藤孝、大和書房、2008年）、『伝える力』（池上彰、PHPビジネス新書、2007年）など、多数の書籍がある。

これだけ『～する力』という書籍が売られているということは、そこに多くの人が興味を持っているということだ。どの題名もシンプルで訴求力があり、読者は思わず手が出てしまうのだろう。コラムを執筆する立場としては、『発想する力』という新刊書があれば、是非読んでみたいと思うのだが…。

さて、この大型連休を読書で過ごす人も多だろう。先日発売された村上春樹さんの『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文藝春秋）は、発売前にはタイトルしか公表されていないにもかかわらず、初版が30万部、そして1週間で100万部が発行されたという。一見、意味不明な題名が妖しく輝き、読者の心を捉える。私も発売日の会社帰りに、全く中を読まずに購入してしまった。

物語は、「色彩を持たない」主人公・多崎つくると、「色彩を持った」4人の友人をめぐる巡礼の旅をし、そこに灰色の人物や沙羅という恋人が登場する。「色彩を持たない」とはどういうことか、「多崎つくると」とはどんな人物か、「巡礼の年」とはリストのピアノ曲かなど、読む前からいろいろと思いを巡らす。読み進むにつれて、自分の抱いた疑問の答えが少しずつその輪郭を現す。そして、ジグソーパズルのピースが少しずつ組み合わさり、徐々に全体像が見えてくるのと同じような興奮を覚える。

村上作品は、本文にとどまらず、句読点やページの余白、行間からもその魅力が伝わってくる。さらに、私は作品全体の『発想する力』の迫力を感じる。コラムの場合、直截的なタイトルをつけることが多いが、村上作品は、『発想する力』の豊かさが、「色彩を持たない題名」の魅力を引き出し、最も鮮やかな色彩を放っているのかもしれない。連休中、「色彩求める巡礼」も亦、楽しからずや、である。